

地域経済を、世界視点で。

Economic Monday

エコノミック・マンデー

デリー東北
THE DAILY TOHOKU



約50年前、八戸青年会議所は市民の地元愛を育む「ラブ・はちのへ運動」を展開する過程で、八戸市の河川や主要道路を塗りつぶすと、海から生える一本の木に見えることに気付いた。これが、知る人ぞ知る「海の樹」。

「海から拓けたまち八戸」を象徴するイメージであり、海からさまざまなモノが入ることで八戸の風土は培われた。その樹の根元に位置するのが湊町。だが、衰退が叫ばれて久しい。木が大きく、強く育つためには、枝々に養分を送り出す根元が元気でなければならぬ。よみがえれ、湊町！

「みなとまち」の象徴 発展と衰退と

「八戸湊」「八戸浦」といわれた湊、白銀、鮫界隈は藩政時代から活気があった。漁業だけでなく、海や川を利用した水運も活発で、人や物資が集まる玄関口として機能した。特に湊の本町や柳町は小中野と並び栄えていたという。江戸時代末期に描かれた絵



1951年

が、当時のにぎやかな様子を伝えている。

八戸市史などによると、本町や柳町方面から白銀方向に向かう現在の陸奥湊駅前の通りはあぜ道だったが、1880（明治13）年に抵幅・整備工事が行われたことで民家や商家が立ち並び、商店街の原型が作られた。

1926（大正15）年に同駅が設置されると、さらに八戸中心街や岩手県北地方などから商人が進出。前年の小中野大火も、駅周辺にイサバの中心が移るきっかけになったようだ。

終戦後に大きな発展を遂げる。物資が不足していた時代、海外からの引き揚げ者らによるマーケットが形成された。魚介類や野菜、惣菜、日用品を扱う店が集まり、周辺の小路や空き地にも広がった。

そこで市は53（昭和28）年、生活困窮者の救済を目的に、市営漁業小売市場を開設した。鉄道を使って各地に赴く「ガンガラ

部隊」といわれる行商が増えたのもこの頃。早朝から三八、上北、岩手県北から買い付け人が殺到した。

68（昭和43）年の最盛期、魚菜市场には275の店子が入居。民間市場が増え、市場通りの駅前朝市は湊の日常風景に。経済成長や八戸港の水揚げ増加なども重なって、「魚の町」、市民の台所として地域経済をけん引した。

ところが、スーパーの台頭など、時代とともに次第に衰退していった。陸奥湊の慢性的な混雑を受けて若い経営者らが開業した八食センターの存在や漁獲量の減少も影響した。

現在も、昔ながらの市場の雰囲気や「イサバのカッチャ」との対面販売、市場で買った魚で作る朝食が観光客には評判だ。しかし、目立つ空き店舗や新陳代謝が進まない街並みは、活力低下を如実に表している。



1976年

市によると、2023年度の市内の主要な商店街の空き地・空き店舗率は、中心街が21.6%、八戸駅前13.8%、白銀台31.3%、小中野新丁9.0%で、陸奥湊駅前の「湊商栄会」エリアは33.6%とワーストだ。

そんな陸奥湊に今、転機が訪れた。魚菜市场のリニューアルを契機に、民間が周辺の再開発に動き出したのだ。

湊地区は歴史的にみても「みなとまち八戸」のシンボル。その復活は、八戸にとって地域再生の象徴になる。

「朝の町」歩くと昼とは違う景色

昭和から平成になる頃、陸奥湊駅前の商店でつく「漬商栄会」は50件ほどの会員がいたが、年々減少し、今では14件になった。日中は閉じたシャッターが目立つ街並み。それでも朝は、昔とは比べものにならないものの、多少は人出がある。「湊は特殊な町だから」（商栄会関係者）。5月のある火曜日の午前4時前から、駅前を散歩した。「客が来るのは月曜か金曜。火曜は少ないよ」。民間の森田市場に入る「加藤商店」の夫婦が教えてくれた。早速、遅番曜日を間違えたようだ。

民間市場の開店は午前2時。昔は0時には



は既に客が集まり、道路に座って店が開くのを待っていたという。大勢の市場の商売仲間も年を取り、後継者不在で辞めていった。「15年くらい前からガタガタと。そして今のよう感じになってしまった」と店の男性。「仕入れに来ている都部のミスーパーや移動販売の顧客も、随分と減った」。菓子やパン、餅、調味料、カップラーメンなど多種多様な商品が並ぶ「後村商店」



には、びっくりなしに客が訪れていた。傾かしい雰囲気を感じる卸問屋で、県外からも小売業者が仕入れに来る。地元のスーパのような感じもあり、午前10～11時にはパンなどが3割引きになる。代表の後村幸男さん（78）によると、創業は1940年ごろ。65年ごろに店を継ぎ、駅前の盛衰を見てきた一人だ。向かいにある市魚業小売市場がリニューアルし、再開業にも注目している。「魚業市場は衛生的に生まれ変わった。またここ

にぎわいが生まれれば」と期待を口にした。続いて、魚業市場に同居する菓子店「工藤商店」へ。代表の工藤正弘さん（43）は、祖母のハルさんがやっていった店を20歳で手伝い始め、引き継いだ。同市場を管理運営する市魚業商業協同組合の専務理事も務める。リニューアル後は観光客が増え、試みに来てみてリピーターになった近隣客も増えた印象だという。

「再開業計画もあり」良い状態に

向かっている。順張って続てきて良かった」と笑顔で話す。「昔はど店の数はないが、代替りした店もある。自分たちの世代で新しいアイデアを出し合い、フットワーク軽く盛り上げていきたい」と意気込んだ。一帯は「市民の台所」の機能は薄れてお

魚の町を支える「ならでは」の店

「魚の町」の商売を支えてきた個性的な店もある。イサバのカッチャといえは割烹着に長靴、頭に巻いたスカーフがトレードマーク。そのスカーフを授けられているのが、1921（大正10）年創業の老舗「松葉屋服店」だ。元は長崎町にあったが、24年の八戸大火で焼け出され、湊に移転した。



スカーフはウールとアクリル製がある。「市場の女性は派手な柄を好む傾向がある。カッチャたちはおしゃべりです」と、3代目の沼田信悦さん（71）。しかし、最近ではウールのスカーフを扱う問屋自体がなくなり、販売は店の在庫限りとの可能性があるという。他にも「ならでは」がある。漁船の船員や長距離トラックの運転手の布団だ。通常の敷布団は横幅が11ほどだが、イカ釣り漁船は60センチ、トラックは70センチ狭い仕様。こたつで寝たいという人も買い求める。小中野地区を含めると、以前は割烹着を仕立てる店も10軒以上あったというが、今はほとんどなくなった。沼田さんは「以前は市外からも買い客が来たもの。面白かったよ」と昔を振り返る。刺身包丁、タタキ包丁、イカ裂き包丁、ホッケ裂き包丁、魚箱を引かけのカギやうろこ取り、血合い取りなんかもある。専門的な包丁・刃物・金物そろそろ吉田金物店には、今でも市場や加工場の人々が訪れる。店主吉田真さん（56）の母洋子さん（79）は、22歳で大野村（現洋野町）から嫁いだ。

1965（昭和40）年の陸奥湊駅周辺の住宅地図。商店でぎっしりと埋め尽くされていた様子が分かる（沼田信悦さん所有）

「それまで湊に来たことはなくて、嫁いですぐ、市場に食材を買いに行かされたのだけど、元気で威勢のいいカッチャたちが怖くて、何も買えないで帰ってきたのよ」と笑う。最盛期の湊の景気の良さを物語るエピソードも。高級な圧力鍋も他地域では売れていない電気ジャーも、湊ではよく売れた。「朝から晩まで店を開いている間は、流行り物や最先端の物が売れた」と懐かしむ。「昔は本当に忙しかった。元々、私はおとなしかったけれど、周りの人が元気なここで販売していくうちに、声が大きくなったわよ」。今では立派な湊のカッチャの一人だ。



陸奥湊



市場だけじゃない…観光資源の宝庫

湊町には市場だけでなく、魅力ある観光資源が多くある。うまく仕掛けができれば、復活の可能性が見えてこないだろうか。こ存じ館岸壁湊町は今年20周年を迎えた。3月中旬～12月の毎週日曜、約300の多種多様な出店者、約3万人の来場者が集まる。その規模は国内最大級で、「日本一カオスな朝市」ともいわれる。今ではインバウンド（訪日客）も3割ほどに上るという。朝市による北奥経済圏への経済波及効



果は、過去には、約16億円とした驚きの試算結果もある。今年10月19、20の両日は全国の朝市団体が集結する「全国朝市サミット」が八戸市で開かれる。20日は日曜に当たり、朝市に6万人の来客を見込んでいる。岸壁で毎年8月に開かれる八戸花火大会は、二重の埠頭を使った打ち上げロケーションが全国的に珍しい。岸壁の夜後、新井田川河口の台高にあるのが館鼻公園。市内を一望でき、2007年に完成した「グレットタワー」などはビル7階分の高さに相当する。タワーからは、八甲田連峰や折戸岳などのほか、下北半島も望める。青森県観光入込客統計では、新型コロナウイルス前は年間5.6万人が訪れている。公園内にあった旧八戸郵便所を改修し、19年に開館した市みなと体験学習館は、地区の歴史や文化、東日本大震災を伝えている。



漁業など海にまつわる信仰の歴史もあり、大祐神社や天王院などの社寺も数多い。坂道を歩いて行けば、湊町出身の偉人の出生地なども見つけることができ、文化的な資源も多いことが分かる。既に集客力の高い観光スポットも点在する。フレッシュルーティで人気が高い「陸奥八仙」、漁師に昔から愛されてきた「陸奥男山」を創設する八戸漁漁は、蔵見学の観光客が絶えない人気スポット。メディアに何度取り上げられているヒラメ漁け井で有名な「みなと食堂」はもちろん、最近では時計・宝石店を改修した「ツキウ食堂」も顧客待ちの列ができています。毎年7月に開かれる「湊八戸小湊まつり」も夏の夕方を彩る。

「湊の活性化で八戸の魅力を高める」一駒井社長インタビュー

湊町で酒造りをする八戸酒造の駒井庄三郎社長は、1999年の「湊の未来を創る会」設立から地元・湊町の活性化を模索してきた一人。現在、陸奥湊駅周辺地区まちづくり協議会会長、まちづくり会社「みちのくみなと未来」の社長も務め、再開業の音頭を取る。駒井社長に課題や展望を聞いた。一湊地区の活性化に取り組む意義は。一番は、八戸の魅力を高めるためだ。「みなとまち八戸」を象徴する陸奥湊をもっと魅力的にすることが、八戸の魅力向上につながる。馬淵川と新井田川が合流する地点で、昔から人や物が集まる場所だった。しかし、今は面影が残るだけでにぎわいは薄

れ、人々が湊に来る目的が失われた。市魚業小売市場だけではもう成り立たない。従来の漁業の町にこだわる必要はなく、イメージを変えてでも活気を取り戻したい。一活性化に必要なことは何か。何もなくても陸奥湊に客が来て売れる時代ではない。客は来るものではなく呼ぶもの。衰退すべくして今がある。魚が取れなくなった。地元住民が意識や考えを柔軟に変える必要があり、今のうちに手を打たなければ、将来性がなくなる。店の形態を変えてなどして、面白そうな場所につけ直す動きが地元であっていい。一今後の再開業の予定は。

計画は遅まきながら進んでいる。将来的には魚業市場を生かしながら、館鼻公園や岸壁岸壁、新井田川沿いを周遊できるような遊歩道の整備もしたい。リニューアル施設では八戸域の特徴的な食材を集め、地域ごとにまつわるイベントも行う。各地の名店にナナトへの入居をお願いしているところだ。年中、楽しい、おいしいを仕掛ける。八戸駅からJR八戸線で湊湊は4駅目、16分で着く。不便だと思われがちだが、実は近くて使い勝手が良い。旅行業者と連携したプランも考えたい。

次回発行日 7/1

ジュース

をテーマに経済を読み解きます。

発行 デービー編集局
住所 〒020-8807 青森県八戸市下町1-12
TEL 0178-44-3111 FAX 0178-42-0888
URL <http://www.dobby.co.jp/magazine/>
寄附先 出版局
デザイン 上田真実
アートディレクション 東京デザインセンター

25年前から模索続いたまちづくり

往時のにぎわいを取り戻すため、湊地区では25年前から地域住民によるまちづくりに関する勉強会や調査が行われてきたが、実際に着手するまでには進展してこなかった。

八戸市は2006年、市営魚菜小売市場を中心に、駅前地区、新井田川沿い、館鼻公

園一帯を対象にした「湊地区まちづくり事業基本計画」を策定した。これを受け、地元地権者らが「陸奥湊駅前地区再開発準備組合」を組織し、再開発が始まる機運が高まった。

07年、市は地権者の意見を基に「陸奥湊駅前地区再開発事業推進計画」をまとめる。

昭和レトロ調の雰囲気を生かした市場、観光機能を持たせた商業施設、市民スペース、住居、駐車場などを整備する計画だ。しかし、総事業費は18億円を超えた。地権者らの個人負担が大きいために規模が縮小、最終的にとん挫した経緯がある。

11年の東日本大震災の被害もあり、その後、しばらく機運は下火のままだっていった。

再燃したのは17年2月。市が老朽化した

魚菜市場の建て替えを中心とした駅前の再開発計画を打ち出した。

「本当に最後のチャンス。この機会を逃せば地域の再生は厳しい」(当時の地権者)

地権者や町内会、商工会などは「八戸みなとまちづくり協議会」を設立し、06年の市の基本計画エリアに朝市が開かれる館鼻岸壁を加えたおおむね25㏩を対象に、「八戸みなとまちづくり再構築プロジェクト基本構想」を練り上げた。

陸奥湊地区のまちづくり これまでの経緯

年	市の動き	地域による活動
1999		「湊の未来を創る会」設立
2002		「湊地区再生まちづくり促進協議会」設立
2004	「湊地区まちづくり事業基本構想」策定	
2006	「湊地区まちづくり事業基本計画」策定	「陸奥湊駅前地区再開発準備組合」設立
2007	「陸奥湊駅前地区再開発事業推進計画」策定	
2010		社会情勢の変化や個人負担などを理由に計画再検討(身の丈開発)を表明
2017	市営魚菜小売市場を含む再開発計画が表面化	「八戸みなとまちづくり協議会」設立 「八戸みなとまちづくり再構築プロジェクト基本構想」策定
2018	市場を核とした湊・小中野地区まちづくり調査業務委託	
2019	市営魚菜小売市場耐震診断	「八戸みなとまちづくり再構築プロジェクト報告書」完成 「陸奥湊駅前地区まちづくり協議会」設立
2020	市営魚菜小売市場基本・実施設計	「陸奥湊駅前地区複数棟改修事業計画」策定(現行計画)
2021	市営魚菜小売市場改修工事着手	まちづくり会社「みちのくみなと未来株式会社」設立 「陸奥湊駅前地区再開発準備組合」解散
2022	市魚菜小売市場リニューアルオープン	「JR陸奥湊駅前地区複数棟改修型優良建築物等整備事業」着手



構想は「新鮮な笑顔あふれる湊町」がテーマ。陸奥湊駅前地区(Aゾーン)、八戸酒造周辺地区(Bゾーン)、館鼻公園周辺地区(Cゾーン)、館鼻岸壁朝市地区(Dゾーン)の四つに分け、各ゾーンの特徴を生かしたまちづくりを進めることを提案した。これが現在始まっている再開発事業につながっている。

官民の再開発、ようやく始動

市が行う市営魚菜小売市場のリニューアルに合わせ、まずは陸奥湊駅前エリアに着手するため2019年、「陸奥湊駅前地区まちづくり協議会」が発足した。協議会は、魚菜市場の東側に隣接する民間4市場と旧青い森信用金庫むつ湊支店の計5棟を改修する「陸奥湊駅前地区複数棟改修事業計画」を発表。官民による再開発がようやく本格的にスタートした。

事業は21年に設立したまちづくり会社「みちのくみなと未来」が担う。民間4市場は同社が建物の譲渡を受け、2階以上を取り壊して1階にリノベーションを施す。旧信金はリフォームして活用。現在、対象の市場に入居している店子のほか、新たに飲食や物販のテナントを入れる方向で進めている。

工事は23年11月末に着工した。26年4月のオープンを目指しているものの、ほとんど築60年以上の建物は想定以上に傷みがひどい。新たに対応する必要がある、開業はずれ込む可能性もある。

これに先じて同社は22年、駅構内に飲食店「駅ナカ酒場 62371◎(ムツミナト)」をオープンさせた。地酒や地元食材を使った料理を、電車待ちの時間を使って気軽に楽しんでもらおうというのが狙いだ。

ゆくゆくは魚菜市場の西側、南側も既存の建物をリノベーションするなどして、店舗や駐車場などに再整備を進める予定だ。

この他、駅前では、別の民間事業者が再活用を検討している物件もあるという。

魚菜市場東側の再開発計画



魚菜市場東側で行う再開発の完成イメージ案の一つ(みちのくみなと未来提供)